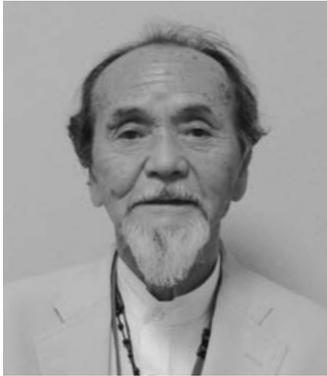


# まちづくりは人づくりから。市民と一緒に育つ図書館を目指します。

(山口県萩市)

特定非営利活動法人 NPO萩みんなの図書館 理事長 **陽 信孝**



## プロフィール

1939年山口県生まれ。国学院大学文学部日本文学科卒業。30年以上にわたり教職に携わり、小中学校校長、萩市教育長などを歴任。現在、萩市の金谷天満宮の宮司などを務める。著書に『八重子のハミング』『雲流る』がある。

**Q** 公立図書館のあり方をめぐる議論が再び熱を帯びています。行政とNPOの協働という運営方式で、全国でも先駆的存在となったのが萩図書館でした。

陽：萩図書館は1901年に阿武郡立萩図書館として開館し、100年以上の長い歴史を持つ図書館です。しかし時代とともに、単に本を読む場としての図書館ではなく、赤ちゃんからお年寄りまで誰もが自由に利用でき、市民生活の身近な窓口となる滞在型図書館への変化や情報化社会への対応が求められるようになりました。築40年近くが経過した旧館は手狭になったため、2011年3月、中央公園の中に新図書館が開館しました。

運営については萩市長から市の直営としながらも、市民で組織したNPOに委託するという方針が打ち出されました。萩が将来的にさらに発展するには、多くの市民が積極的にまちづくりに関ることが必要であり、まちづくりは人づくり、市民とともに育つ図書館が大事だという姿勢です。そこで、行政とのパートナーシップとして、2010年11月に「NPO萩みんなの図書館」を設立しました。この名称には、市民一人一人が主役なのだという思いが込められています。

**Q** 行政とNPOの協働で、どのように業務が分けられていますか。

陽：図書館は萩市の直営で9時から21時まで年中無休で開館し、その主たる運営業務をNPOに部分委託しています。カウンター業務やレファレンスサービスなどの基幹業務を

NPO会員が行うことは難しいため、NPOが職員を雇用しています。会員はボランティアとして、返却資料の配架や絵本の読み聞かせ、環境美化など、アイデアを出し合って諸活動を行っています。指定管理ではないため、館とNPOは定期的に二者協議を持ち、年間の運営計画やその他の情報を交換しています。行政と連携した活動ができるのも協働ならではと言えます。先日男女共同参画推進室と協力して関連図書を展示し、男性が読み手となって子どもに読み聞かせを行うイベントを開催しました。

NPO設立時に職員を採用する際、18名の定員に対して120名を超える応募者が集まりました。職員には司書資格を持っている人だけでなく、デザイン科出身の人や保育士資格を持っている人などもあります。行政とNPOの協働は初めての試みで大変苦労していますが、市民の暮らしに役立つ図書館サービスを目指して心のこもった活動をしています。

**Q** 新たに導入した取り組みはありますか。

陽：萩図書館はもともと県立であったため、現在でも貴重な資料が多く残っています。新しい図書館になるにあたって、萩の宝である歴史資料をぜひ市民に公開したいと考えまし

た。そこで電子図書館を全国に先駆けて導入し、貴重資料を電子端末で見られるようにし、電子書籍の貸出設備も構築しました。電子書籍に関しては、著作権の問題で人気の本を購入することは難しいですが、将来コンテンツが拡張した時にも対応できる体制になっています。また、デジタル化した歴史資料以外に、郷土史と明治維新史関連の資料を集めたコーナーも作っています。

歴史好きの市民が多いのは萩の特徴で、その利を生かし、維新史や郷土史に詳しい市民の方に週2日ほど歴史関連のレファレンスに協力していただいています。全国からの問い合わせへの対応だけでなく、一緒に職員を育てていただくことも大きな目的です。そういった形で市民の力を借りて、貢献できる場を用意することもNPOらしい活動です。

また、地域貢献の機会として、雑誌スポンサー制度も導入しました。雑誌コーナーを充実させるため、申し出のあった事業者や個人の方々にある雑誌の1年分の費用を負担していただくという制度で、提供者の方々の名前を最新号カバーなどに表示しています。これも市民が萩図書館を支える取り組みと言えます。

さらに、読書啓発のために導入したのが、読書通帳です。地元の信用金庫の協力のもと、借りた資料のタイトルと日付などが記帳できる機械を館内に設置しました。大人にとっては記録に、子どもにとっては思い出になります。子どもが生まれてから読み聞かせた本を記帳し続けて、大きくなったらプレゼントするという方もいます。

読むことは、子どもの情操や感性を育てる上で大切です。それが失われつつある時代に、年齢に合った本に出会える環境を整え、市民の暮らしに役立つ情報を図書館から発信できたらいいと考えています。

インタビュー・構成：  
城市奈那（株式会社ジェイクリエイト）